海燕社の小さな映画会 2022

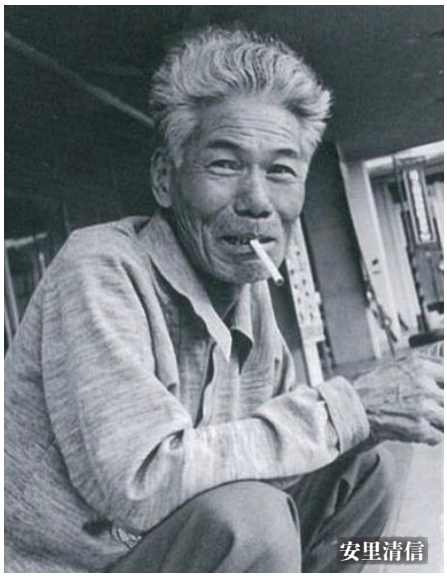
5/14(土) 18:00~ 沖縄県立博物館美術館(3F)講堂

17:15 受付 17:30 開場　料金 1,500円 ※完全予約制　後援：沖縄県、那覇市

予約：海燕社（かいえんしゃ） ☎ 098-850-8485 /✉mail@kaiensha.jp

九州・沖縄から 文化力 POWER OF CULTURE

特集：沖縄日本復帰50年


安里清信

「海はひとの母である」
「自分の生存は自分で創れ」

ドキュメンタリー映画〈復帰40周年製作作品〉

シバサシ
ー 安里清信の残照 ー

監督：興石正／カラー／90分／2012年制作／じんぶん企画

※シバサシとは沖縄本島で旧暦８月に行われる物忌行事。ススキなどを家の四隅にさす。

本土復帰とは何だったのか。このねぼけた問いがまだ続けられねばならないのはなぜか。

1913年、与那城村屋慶名で生まれ、中国山西省での激戦に従軍し、深い悲しみをいだいて帰ってきた安里清信。廃墟の沖縄で教員として生き、本土復帰の翌年、国策としてのCTS（石油備蓄基地）をふくむ巨大な金武湾コンビナート計画に抗った安里清信。もし10年にわたる「反CTS闘争」がなかったら、金武湾には原子力発電所ができていたことを、沖縄は忘れてしまっている。“沖縄の住民運動にリーダーはいらない”と言い続け、一人一人の生存をかけた歩みを共に歩みぬいた安里清信。「海はひとの母である」、その一点につっ立ち、時の革新県政の「平和産業論」に対して抗い続けた安里清信。屋慶名人（ヤケナンチュ）としての誇りにみちた69年間を生きぬいた。それはそのまま、現在の沖縄そして日本本土を告発し超克する生き方であった。

飼いならされ、着ぶくれにあえぐ沖縄。埋め立てられ続ける沖縄の海の底で、安里清信は“自分の生存は自分で創れ”と沖縄をつきはなし、その海底森林で命の交歓の場をこしらえているだろう。

「金武湾を守る会」がつむぎ出したことは、〈海と大地と共同の力〉、それは一人一人が自分の生存の足元をかためるときにつかみとった、祈りのことばでもあった。

安里清信生誕99年、山原の地より安里清信に会いに行く。（監督：興石正）

※DVDジャケットより

…住民運動に代表はいらない。住民の一人ひとりが代表なんです。したがって「金武湾を守る会」には代表はいません。大幹部たちの右向け右、左向け左になってしまう、そういう組織は住民運動にはふさわしくないのです。しかも、我々には第二次大戦の苦い経験がある。代表者がいようといまいと、踏みにじられるのは、一人ひとりの個人です。…

安里清信
『海はひとの母である -沖縄金武湾から-』（晶文社）
1981年発行・絶版より抜粋

沖縄県の緊急事態宣言発令中（会場閉館の場合）は映画会は中止です

※上映会に参加の際は、マスク着用、検温、手指消毒にご協力ください。当日、熱、咳、だるさを感じたら、来場をお控えください。